
キミノウタ

麻木高斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミノウタ

【Nコード】

N6530F

【作者名】

麻木高斗

【あらすじ】

「個人能力育成プログラム」。通称「IAD」。それは、学力による個人の価値判断が廃れてきた結果台頭してきた新しい概念。「個人の適性に合わせたその個人にしかない特別な能力」にこそ重点が置かれる現代で、4人の物語は今、静かに動き出す・・・

#1 始まりの記憶

「だーかーらー！一番上はハートの7だったっつてんだろ！」

「ちがうわ！！スペードの9じゃーぼけー」

聞きなれた二人の声が聞こえる。ちなみに今は午後十時。騒いだら明らかに近所迷惑になる時間帯だ。まだあの二人はやってたんだ、と少年は半ば呆れながら呟いた。

少年の名は志賀直樹。

普通と言えば至って普通。極々普通の小学6年生だった。特に特技があるわけでもないし、成績優秀というわけでもない。そもそも小学生の段階で成績の概念があるかどうか微妙だが、テストはだいたい70点前後だ。

もの静かというわけでもなく、喋るときは喋る。友人はまあ、5、6人よく話す人がいれば十分「普通」に当てはまるだろう。バレンタインに告白イベントが起こる世界を「雲の上」と称するあたりは少々個性的と言えるかもしれないが、まあつまりそういうことだ。

普通のお手本とも言えるようなその少年は、居間に通じるドアを開け中にいる二人の男女を見た。

一人はツンツンした髪をもつ頭の悪そうな少年、井戸田祐樹。

もう一人は、腰まである長いサラサラな髪をもつ少女、柊ゆかり。

「頭の悪そう」と表現したのは少々語弊かもしれない。彼は実際に頭が悪いわけではなく、頭の悪い行動をしているだけだ。芸人的立場、と言えばわかりやすいだろうが、つまらないことが嫌いなだけで、なんとか場を盛り上げようとするムードメーカーなのだ。ただムキになると少々大人げない行動に出るところは直樹や弘毅に度々手を焼かせている。

そんな彼に鬼の形相を向けている彼女は、とてもおしとやかとは言えない。整った小振りの顔、頭の横から飛び出しているゴムで縛った一房の髪が印象的な彼女は、確かに黙っていればかわいいと言えるかもしれないが、言葉づかいも性格もメチャクチャな彼女を扱うことができるのは全国探しても彼女の親か、今この家にいる男子3人くらいなものだろう。

そんな二人は、この家、つまり瀬良弘毅の自宅の居間でトランプに白熱していた。どうやら「大富豪」をやっているらしい。

「てきとうなこと言うな！！スペードの9なんてずっと前に弘毅がそれ出して上がったたじゃねえか！」

「そ、それはクローバーよクローバー。そうクローバーに決定！クローバーじゃあぼけえー」

「……じゃあいよいよスペードの9で。出すのはハートのQにするから」

「……」

「どうした？出せないのか？じゃあ切って、さっきのハートの8だして、切って、ダイヤの5で上がりっつと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あつぶねー。何とか勝ったぜー！！」

「喜んでる場合じゃないでしょ、まったく。どうして祐樹は・・・」

渋い表情で直樹は言う。

目の前には満面の笑顔でガッツポーズを決める少年と、嗚咽を漏らしながら大粒の涙を浮かべる少女。

迫りくる波乱の予感に直樹は思わず後ずさる。こんなことになるならいつそどちらかを先にあがらせておけばよかったと、彼は今更ながら後悔の念を噛み締めた。元より直樹はそのつもりだったのだが、弘毅が「面白いから残してみよう」と言っけてきかなかったので、渋々合意したのだった。

ただでさえ負けず嫌いなゆかりが、自分に最下位という不名誉な称号を与えた相手の勝利を誇る姿を見て、黙っていられた日には天から槍でも降るだろう。このあとに予想される展開を直樹はあれこれと思案するが、既に万策尽きていることに気づくのに5秒もかからなかった。

まあ最もやつと年齢が二桁に達したばかりの少女が上級生相手にトランプをしていること自体が既に驚きだが。

「こうなったら弘毅を呼ぶしかないけど、あつちはあつちでゲームしてるしなあ」

さつきまで直樹がいた和室にあるテレビにくらいいついているのは、精悍な顔つきの少年だった。サラサラで薄茶のショートカットの髪に、キリツとした目つき。鼻は高すぎず低すぎずで、細い顎にうま

く調和している。十代で活躍しているアイドル歌手なんかはこんな顔立ちの人が多い。そう言われて納得できるような少年だった。

レースゲームでもしているのか、さつきから「あと0、5秒!」とか「そう曲がればいいのか」とか「今度はどうだ!」とかしきりに叫んでいる。

同学年の最上級生として本来なら直樹が下級生をなだめて然るべきだろうが、決壊寸前のゆかりを鎮めることができるのは弘毅以外にこの場にはいないことは経験上わかっている。情けない思いながらも彼は入ってきたばかりの居間のドアノブに手をかける。が、ドアは勝手に開いて今度は「ついよっしやああああアア」という歓声と同時に弘毅が居間に入ってきた。

「おいおい直樹!とうとうあの記録を華麗なコーナリングで3秒も上回っちまったぜ!さすがの兄貴でもこの記録はぜってえ破れねえ!約束通り今度『呪我』買ってもらおうと。・・・ってなんだこの空気は?」

来月発売予定の戦国RPGが手に入ると確信した能天気な少年瀬良弘毅は、ひとしきり歓喜した後居間の空気の異様さに気がついた。

ちなみに兄である瀬良亮介がそれより10秒も速いベストタイムを持っていることを彼は知らない。最近のゲームはメモリーカードにセーブデータを保存する形式のものが多く、本体から切り離して持ち歩くことができる。つまり、複数のメモリーカードを使って同じゲームのデータを複数つくることも可能なわけだ。最も普通にゲームをプレイする分には一作品につき一つでも十分である。彼はただこうやって弘毅をおちよくるのが好きただけだ。どうせ明日には「どよ〜ん」という効果音が似合うこの世の終わりを見たかのような沈んだ表情が見れるに違いない。

「まあこの二人のガチなら何があつたか大体想像はつくが・・・」

実のところ弘毅には「祐樹がゆかりの面倒をみれるか試す」という考えがあつて、直樹もそれを理解して承諾した事情があつた・・・のだが、見事なまでに期待を裏切る眼の前の状況に、弘毅の顔からは前向きな印象が消えている。

ゆかりは相変わらず目の淵に涙を浮かべているが、必死に泣くまゝとしているのは分かる。一方祐樹は女の子を泣かせたくない男の本能と言わんばかりの勢いで人間の関節のどこをどう曲げたらそんな動きができるのか不思議なくらいの軟体動物張りの動きで彼女のご機嫌取りに必死だった。

クラスの真ん中でやったら間違いなく全員勢いよく後ろへ飛び退くようなシユールな動きも、弘毅は当たり前のようにスルーして、ゆかりの手の中にある2枚のカードを見た。

番号はスペードのAと、ダイヤの2。

弘毅は何かを理解したかのような、安堵した表情を浮かべ、軽く息をついて言った。

「この勝負、ゆかりの勝ちだ」

タコ踊りをしていた愉快な少年祐樹の動きが不自然な形で停止する。直樹もさすがにびっくりした表情で弘毅を見た。

「ゆかりの手札をしてみる。正直この手札はほぼ最強だぞ、最強。こんなカードを手札に残しておいて負けるほうが不自然だ。まあ理由はただ一つだろうが、念のため聞いておくか。ゆかり、このゲー

ムで一番『弱い』カードは何だ？」

「……『A』じゃないの？」

祐樹がその場ですっ転んだ。弘毅は「やっぱりそうか……」と
呟きながらうなだれているので、直樹が代わりに状況を説明する。

地方によって呼び方は様々だろうが、『大富豪』とは配られた自
分の手札を一定のルールに従っていかに早くなくすかを競うトラン
プゲームだ。各カードには数字に従って『強さ』が割り振られてお
り、基本的にその順番は強い順に「3、4、5、……、10、
J、Q、K、1、2、ジョーカー」となる。出す順番を決め、自分
は直前の人より強いカードなら出すことができる。出せるカードが
ない場合はパスすることも可能で、自分が出して自分以外のプレイ
ヤーが全てパスしてもう一回自分にターンが回ってきた場合、それ
は『切り』となる。そうになったら、直前の人（≡自分）の出したカ
ードは無視して好きなカードを新たに出すことができる。

トランプゲームの中では最もメジャーなゲームであるゆえ、その
ルールにはベースとなる先のルールに加えて様々な「追加ルール」
が存在する。

例えば、開始時あるいは『切り』のとき同じ数字が揃って出され
たら以降の人はそれより強い揃った数字を出していかなければなら
ないルールに、4つ揃った数字が出たら先の強さの順が逆になる『
革命』。8が出たらそのターンで『切り』となる『8切り』、『Jが
出たら次の『切り』まで強さの順が逆になる『Jターン』などがあ
る。これらのルールは数字に関するルールの一部だが、マークに関
するものもあり、それらも地方によって独特の呼び方がある。

これらのルールを踏まえれば、ゆかりの手札がいかに強かったか
は最早言うまでもないだろう。男子3人がいかに「常識じゃん？」
といった顔で勝手にゲームを進めてしまったせいで、ゆかりはルー
ルを詳しく聞くこともできず、見よう見まねでせざるを得なくなっ

てしまっていたのだ。

負けず嫌いの彼女が祐樹から「なんだおめえルール知らねえの？」とバカにされたような（少なくとも彼女はそう解釈した）聞き方をされて、素直に「わかんない」などと言えるはずがない。ゲーム中になんとかメインルールと『8切り』のルールだけは覚えたのか、祐樹が出そうとしたハートの8を見て、いきなり近場にあった扇風機の風力切りかえを「強」にして場のカードを吹っ飛ばし、8が出せないように「出たのはスペードの9だった！」と言い張った。

これが、一連の騒動の顛末だった。

3対1で互いに文句がたくさんあっただろうが、いくら気のおけない仲でも「常識を今更聞けない」という経験は誰でも一度はあると思う。弘毅はそれを配慮してか、ゆかりの肩をもつ形でこう言った。

「ここは判定勝負だな。ゆかりはルールを知らなかった。しかも手札を見てみればかなり強いカードが少なくとも2枚はあったと見える。もしかしたらトップであがっていたかもしれない。よってここはゆかりを『大富豪』にし、あとは普通にあがった順で俺が『富豪』、直樹が『平民』、祐樹が『大貧民』だ！」

「……せめて『貧民』にしてくれよ」

「『貧民なんていらねえ！大貧民で十分だ』とか言ったのはお前じゃないか」

「……………そうでした」

「やっぱりひろきはよわいな〜年下のあたしにも負けるなんて」

「お前それが目上の人に対する口のきき方か!？」

「年上はなおきとこーきだけだ。お前は9歳だ。」

「おれは正真正銘11歳だ〜!!てかこんなでかい3年生いたらこえーだろーが!！」

「5年生でもこわいけどな。そしてゆかりと喧嘩してるあたり精神年齢は9歳か」

「ぐ……うおお……言い返せねえ……」

「でもこーきはバカだけだな」

「んだとコラア!？」

「3人ともホントに近所迷惑だつてばー」

トランプを片づけながら、すっかり元に戻ったいつも通りの3人を見て直樹は少し苦笑する。

これが日常だった。

4人は同じ学校に通っている近所の幼馴染で、最上級生である弘毅を先頭とし、主に「くだらないこと」を「試練」と称して遊ぶことが多い。例えば今日なんかは「放課後や旅行先、ふとした時に簡

単にでき、かつ負けたときに多大な被害をくらう恐れがある魔のゲーム「大富豪」に対して対策を練る」というものだった。ちなみにきっかけは修学旅行から帰ってきた弘毅の一言であったりする。彼と直樹は別のクラスなのだが、旅行で何があったかは一応直樹の耳にも届いている。弘毅の名誉のために黙っているだけだ。

そんな彼らが通う「国立黎明院学校」を始めとした全国の小、中、高等学校には「常識的な」学校とは異なる教育カリキュラムがある。

「Individual - Ability - Development」。通称「IAD」。

「個人能力育成プログラム」とも呼ばれるそのカリキュラムでは、学校の授業で伸ばすことが難しい能力の育成が目標とされている。

例えばいくら勉強ができてコミュニケーション能力が不足した人間を会社や企業は採用しようと思わないし、逆に誰とでも気軽に話せるような人間には高度な心理学の知識が望まれる。もっと身近な話をすれば、学校の成績が悪くても将棋やチェス、オセロが得意だったり、いたずらや悪知恵に優れた人間もいるということだ。弘毅達のような小学生時分では休み時間にやるドッジボールが上手いと注目の的になるかもしれない。

「コミュニケーション能力」「運動神経」「知恵」その他諸々人間には紙と鉛筆だけでは測れない様々な「能力」が存在する。それらを個人の適性に合わせて伸ばす目的でつくられたのがIADというわけだ。

本格的な育成が始まるのは中学生になってからだ、小中一貫の黎明院では小学校高学年から各自の適性に沿ったカリキュラムが始まる。直樹と弘毅は同じ発想知能系であるため、他クラスとの合同授業でも一緒になることが多い。それは宿題でも然りで、共通の宿

題の一つに「自由課題」というものがあるのだが、こちらの学年提出状況は「自由」という単語からもわかる（？）通り言うまでもないだろう。

しかし弘毅達はそんな天然記念物と言わんばかりの自由課題を提出「することができ」数少ない生徒だ。

休日にやったことをいちいち記録して提出する面倒を乗り越えている点では偉いかもれないが、大半の生徒が自由課題をやらない理由はそれ自身が漠然とし過ぎていて何をしたらいいか分からないからである。算数の問題を解くことができてもつくることは難しいのと同じことだ。実はそれも自由課題の「課題」の内に含まれることを生徒は知らされていないのだが、弘毅は遊ぶ前に大抵「試練」と言っでやることを明らかにするので非常に書きやすい。今回だつて『大富豪』について適当に勝てるコツみたいのを並べて提出すればそれは立派な自由課題になる。多くの生徒はその事実を知らないのだ。

だがそんな課題云々の理屈より、直樹は彼らといるのが楽しかった。

弘毅が「試練」といい、無茶をする。僕たちはそんな弘毅に引張り回される。年の割に頭のいいゆかりがたまに良い発想を出し、失敗しても僕たちはいつも笑っていて、その中心には祐樹がいた。

変わらない4人。

変わらない日常。

それはただの願望なのかもしれない。両親が原因不明の爆発事故で亡くなってから、彼はずっと一人だった。訃報を聞いた時のあの頭が空っぽになる感じは今でも記憶にへばりついている。当たり前だと思っていたものはいとも簡単になくなりうるということ、彼は身に染みて理解していた。

脳裡に焼きついた灼熱の光景が視界をよぎる。

飛び交う大人の大声が、肌にまとわりつく熱気が、まるで地獄の底から這い出た獣のように威嚇する。

喰らってやる、と。

お前の両親を喰らったように、今度はお前の大切な友達をも喰らってやる、と。

そして決して逃がしはしない、と。

呼ばれた声に振り返る。

どういう成り行きでそうなったのか、そこにはゲームのコントローラーを握った、いつもの面子が揃っていた。ゆかりはもとより祐樹もあまりテレビゲームをする方ではないので、おそらく弘毅がやらせているのだろう。彼の顔がだいぶ青くなっているのはもしかしてあれか？だとしたら思ったよりも『早かった』。

「あれから15年か・・・」

呟きは静かに虚空へ消える。木々の葉が擦れる涼しい音だけが、その呟きに呼応しているようにも見えた。その声はどこか優しく、どこか温かく、そしてどこか懐かしい。

揺れる木漏れ日に包まれて、彼は一人思い出す。

風の思い出を。大切な仲間を。そして「IAD」にまつわる一人の少年の惨劇を。

「今日くらいは、いいか・・・」

仲間が眠る地の上で。

仲間とともにいつか見上げた空を見ながら、彼は静かに記憶の糸を、紡ぎ始めた。

#1 始まりの記憶（後書き）

こんにちは。最近趣味で小説を書き始めました。インデックスです。忙しい中暇を見つけて書いた稚拙な文章ですが、感想等あったら頂けると嬉しいです

#2 動き出す力

都内某所。

無数の高層ビルが立ち並び、白衣姿の人々「のみ」が行き来するその光景は都市としてはあまりに異様であった。上空の境目が地上から視認できる建物は数えるほどしかなく、周囲を見渡しても目に映るのは白づくめの人間ばかり。個々の人間の差といったらここでは顔と見た目年齢くらいかもしれない。聞こえるのはほとんど都市に特有の雑踏音だけで、ときどき2、3人の話し声が入るものの、その雰囲気には愉快な様子は一切ない。

「IAD研究区画」

別名「寒冷都市」とも呼ばれるその区画は、各教育機関が所有する研究施設が集まってできた一つの研究機関である。「Individual - Ability - Development」の略である「IAD」とは、学力テストで測ることの難しい人間の能力の育成計画のことを表す。今日の日本ではかつて重要視されていた「学力」はもはや身長などの個人を表現する一つの方法でしなくなり、代わりにそれぞれが持つ特有の「能力」がその個人を表す指標となっているのだ。例えば運動神経に優れた発達が予測される子供には幼少期から基礎体力強化に集中した教育プログラムが編成され、さらに頭角を現す者にはオリンピック選手育成コースが用意されることもある。前頭葉系の発達が著しければ早期から大学教育を受けるものもいるし、中には数十桁の計算を一瞬で行う能力を身につけた学生もいる。

だがそこまで精錬された能力を身につけるためには様々な学問的視点からのアプローチを交えた教育プログラムが必要で、そして現在ではそれが個々の教育機関のレベルを計る物差しになっている。したがって所有される研究機関は必然的に大きくなり、そしてそれらはここ「寒冷都市」に集まることで互いの技術を共有し、ときに牽制し合いながら一つの研究機関として機能しているのである。

このように全国の小中高および大学は能力育成を「商品」として掲げる企業と化しているため、それらが抱える研究機関が一つに集まる場所となればその雰囲気は「寒冷」になるのは自然だろう。競争原理が生み出すギスギスした環境はこの都市区画全体を「都市」という概念から恐ろしく遠ざけているのである。

「あー・・・ここまで高いとマジで人がゴミみてえだわ」

ガラス張りのエレベーターの中から外を見下ろす少年は吐き出すように呟いた。

その眼は紅く、ただただ紅い。

ガラス玉を埋め込んだかのような非現実的なその色は、見る者を戦慄させるほどの殺意を放っている。

体格は十代前半の少年だった。最低でも彼の見た目より十歳は年上であろう白衣姿の人々と照らし合わせれば、そんな黒を基調とした私服姿の幼い少年には場違いという言葉がとつともなく似合う。灰色に染まったショートカットの髪は風もないのに毛先が揺らぎ、それが人間味のない不気味さを異様に醸し出していた。

ヒトの皮をかぶった化け物。

そんな陳腐極まりない表現が、しかし最もしっくりくる少年がそこには佇んでいたのだ。

「にしてもあの野郎、213階とかフザけんじゃねえよ。いつたいどんだけかかると思ってやがる」

エレベーターの室内で彼は一人悪態をつく。

ここは寒冷都市の中で「国立黎明院学校」が所有する施設のうちの一つである。各学校につきだいたい2、3の施設を所有しているのが普通だが、この学校に限ってはその規模は半端なく大きく、所有する施設は寒冷都市全域に点在するほどである。しかもその研究も日本で一番進歩していて、中でも脳神経系の研究は日本に留まらず世界をリードする存在である。

しかし無数に存在する教育機関の中でこの学校だけが突出した進歩をみせることができたのは、ひとえにこの化け物のような少年の「能力」のおかげに他ならない。それは単にその能力が人間としてケタ外れであることによる宣伝効果というより、むしろ彼の能力そのものによる恩恵といった方が正しいかもしれない。今日呼び出されたのも、来年学会で発表される予定の論文を仕上げるための実験協力が主な目的だった。

「まあ俺も尋常じゃねえ謝礼金もらって生活しているから文句言える立場じゃねえけどな」

ガラス越しに下界を眺めていた少年が振り返ると、ドアの上には「37階」と表示されていた。

寒冷都市に存在する建物には最上階が300階を越すものも珍し

くはない中で、217階が最上階であるこの「国立黎明院学校所属IAD研究機関統括本部」は比較的低い方に入る。建物の高層化を招く原因は明らかで、この地価が人口密度の最も高い首都中心部よりも約7倍も高騰しているからである。寒冷都市に施設をもつ教育機関は日本でもほんの一握りのトップクラスで、中小研究施設なら日本各地に数知れず存在する。それらも地方で固まって研究施設群をつくっていたりもするのだが、やはり世界レベルを誇る寒冷都市の技術力には足元にも及ばない。

「痛つ・・・やっぱりまだ頭痛は残るか・・・まああれだけ能力使って助かつちまっただから当然か」

振り返った直後、針で突き刺すような頭痛を覚えた少年は片手で軽く頭を押さえた。

少年にとってそれは「やり足りなかった」に違いない。能力の完全抑制自体は不可能だが、普段はその「対象」を「自分に関すること」に限定することで脳への負担を最小限に留めている。全力展開した状態では10秒ももたないことは経験的に分かっていたはずなのに、少年は1カ月前にその能力を5時間連続で全力展開していた。当然正気など保っていられるはずもなく、脳細胞の約半数が一時停止し、残りは死滅した状態で国立黎明院学校医学部付属病院へと運び込まれたのだが、その卓越した技術のおかげで「不幸にも」一命は取り留めた。

したがって、「世界各国の最重要機密事項を世界に向けて暴露し、最終的に自分も死ぬ」というテロ計画は失敗したことになる。

最も、表面上は彼が単に能力を使いすぎて自爆したに過ぎないため、罪を問われるようなことは一切なかった。黎明院の研究者の上層部には事情を知るものもいたが、彼らが自分達の貴重な収入源をわざわざ警察に差し出すような愚かな正義感を持ち合わせているはずがない。結果として一連の出来事は「事件にならなかつた事件」と化し、彼は「能力を安定させる」という名目で一時的に能力を全力展開できないように手術を受けた。

能力の回復することだけが目的の手術なら後遺症を残すことなく成功するはずだったが、この頭痛は能力を無理矢理薬品で抑え込んでいることによる副作用で、能力の抵抗が鎮静化して安定すれば薬は切れる仕組みとなっていた。

「『死ぬほど』面白えと思ったんだがなア。『国立黎明院学校支配下におけるいかなる権利と自由を保障する』って割には死ぬことだけは許さねえのな。俺は生かさず殺さずってわけですかい」

痛みに顔を歪ませながら。

「けどまあこんなクスリは1、2週間で切れるんだし、その後今度は時間をかけてゆっくりと慎重にテロをとでもしましょうかね」

放つ言葉は恐ろしく冷たく。

「何せ命を捨ててでも本気でやりてえと思えた初めての目標だからな。ただ何もせずに死ぬのは不本意だが、これだけデカいことぶっ放して盛大に死ぬるつてのは後味がいい。『第三次世界大戦を引き起こして死ぬ』・・・いいねえ、実に面白そうだ」

世界の死に歓喜する少年は、奇しくも世界の上空でそれを呟いていた。

213階。

廊下も辺り一面「白」だった。それは行き交う研究者の白衣だけでなく、床も壁もその全てが白に統一されていたからでもある。黒い少年がそこを歩く光景は異様を通り越してもはや神聖さすら感じさせた。

1、2分ほど歩いた後、目的の部屋にたどり着いた彼はイラついた様子でドア付近の入力機械を2、3回叩いた後、指紋、網膜認証など各種セキュリティを解除して中に入った。

そこにいたのは、二十代後半と思しき男性。

少し茶色がかかった髪に、温和な眼つき。通った鼻筋に、ほっそりとした顎。研究職に携わらなければ俳優としてもやっていけそうなその顔立ちには、しかし不精ヒゲがたくさん生えていた。身だしなみをあまり気にしないのは性格なのか、それとも好みでそうしているのかは見た目では判別がつかない。

少年は開口一番、その胡散臭い研究者に向かってこう言った。

「ここ来るたびに毎回思うんだが、お前よくこんなつまねエ白一色のところずっと試験管とにらめっこできるなあ」

「試験管とにらめっこするのが私の仕事だし、生きがいでもあるからね。つまらないなんてとんでもない。むしろ楽しみの毎日だよ」

嬉々とした表情で青年は返す。

少年は「はいそオですか」とまともに取り合うのも馬鹿らしいという感じで部屋を見渡している。

基本的には廊下と変わらない白を基調とした壁と床だが、どこかの国の土産物のような置物がたくさん置かれていたり、何に使うのか分からない謎のガラス細工が飾って（？）あつたりするあたり、ここが部屋であることを改めて実感させられる。

キヨロキヨロと部屋の内装を見ている少年に向かって、今度は青年が口を開いた。

「ところで『トウルザー』、ドアを開けるたびに毎回毎回セキュリティを力技で突破しようとするのはいい加減やめてくれ。君の指紋、網膜、脳波は既に登録されているし、暗証番号入力にそれほど時間はかからないだろう」

「そつちこそ俺が来るってわかってんなら最初からセキュリティを解除しておくくらいの気遣いをしろ。213階までのぼってきた拳銃セキュリティの解除まで要求されればさすがにムカついてくらあ」

「いつも予定時刻より何時間も遅く来たり早く来たりで到着の目途がたたないのは君のせいでしょうが。見てみる、今日だって昼に来てくれて言ったのにもう日が沈む時間じゃないか」

「はいはいすいませんねエ。あいにく俺の体内時計はネジが100個ほど外れていて現在修理中なんすわ」

「まーたそれか。いつたいいつから修理中なんだ君の体内時計は・

「

青年は呆れたように溜息をつく。至極いつものやりとりなのだが、毎回このテの会話で『真実者』の身勝手さに手を焼かされる。このままだと埒があかないので、彼は本題に入ることにした。

「で、『能力』の調子はどうだ？さすがにまだ不安定か」

「そりゃあそうさ。脳にクスリ投与したのだって1カ月前だぜ？『俺の判断が正しければ』あと1カ月は必要だな。この状態で能力使えば62.3%の確率でまた前みたいに愉快的な状況になる」

「死にかけたのに愉快だなんて。君はもつと自分の命を大切にすべきではないのかい？まだ小学生だろうに」

「どオでもいいわ、そんなこと。何度も言うが俺はいつ死んでもいいと思ってるんだ。自分の愉しめることなら何だってやってやるさあ」

「・・・あんなに能力を全力展開して何をするつもりだったのかは知らないが、ほどほどにしておけよ、まったく」

忠告するが、しかし彼の顔は引きつっている。無理もない。相手はあの「真実者」だ。その気になれば任意の人間一人や二人容易に社会抹殺できることだろう。ましてはそんなバケモノが自分の死を覚悟で何かをしでかすと言っている。目的を聞き出すことはおろか、下手を打てば自分が今この場で殺されかねない状況だ。

自分には、この少年を止められない。

だからこそ、冗談まがいの雑談はできても、それ以上に踏み込むこ

とができない。一応教師として授業を受け持つことはあるものの、この少年は教師が体当たりで生徒の心を掴む熱血先生の次元をとうに超えている。具体的数値とともにサラッと嘘をつくあたりがそれをよく物語っていた。

重い息をついた後、青年は一枚の紙とともに少年へこう告げた。

「じゃあここに書いてある研究施設へ向かってくれ。暗証番号もここに書いてある」

「すぐ行きゃあいいのか？それとももう少し空けてからでもいいのか？」

「遅刻したことを少しは考えてくれ」

「わーっただよ。すぐ行きゃあいいんだろ？じゃあな、瀬良」

「ああ」

少年は踵を返し、灰色の髪を不気味に揺らして部屋を出て行った。

「……『認識した対象に関する真実が分かる能力』……か」

静寂を取り戻した部屋の中で、彼は息を吐く。

それは、少年をあそこまで変えてしまった「能力」に対してか。

少年を前に、すくんで何もできなかった自分に対してか。

あるいは、両方が。

「・・・その能力を極限にまで抑えられれば、あいつは変われるに
違いないんだ」

しかし、青年はそれでも思う。

この恐怖を乗り越えてみせる、と。

変えてみせる、と。

地獄に囚われ、それすらも望む哀れな少年を救ってみせると。

それこそが、彼の研究の「真実」だった。

「次の論文が、勝負だな・・・」

西日を見つめるその表情には、もはや一切の迷いは残っていないか
った。

#2 動き出す力（後書き）

#1でも少し触れましたが、この少年の動向が今後の物語の鍵となつてきます。全てを知る能力を持つ少年の胸中やいかに！？

次回は少し長くなりますが、どうかお付き合いいただけると幸いです。

#3 「超演算者」の少女 1

夏。

雲一つない午後の晴天。

ぼかぼかとした陽気に、プールサイドを見下ろす窓からそよぐ風。

黒板から見て最右列の後ろから2番目の席に座っている直樹にとって、これは絶好の睡眠環境だった。すぐ左手からは全開となった窓を通して心地よい風と歓声が頬を撫でている。プールの授業が終わっていい感じに疲労を蓄え、給食の残り物争奪戦に見事勝利していつもより少し多い昼食を終えた彼の身体には、それらはスリープの呪文と呼ぶに実にふさわしかった。

「・・・した・・・がって、この・・・二つの変・・・数にはある・・・相関係数がある・・・とが推測で・・・けだが・・・」

教師の声が頭の奥でエコーがかかったように妙な響き方をする。

現在時刻は1時15分。授業開始から15分しか経っていないのにも関わらず、スリープの呪文で召喚され続ける睡魔を前にして彼は早くも意識ライフポイントが赤く点灯中である。「発想学」の教師は寝ている生徒を片っ端から指していつて答えられなかったらその問題をノートに50回やらせるといって地獄の閻魔様も脱帽するよな鬼教師っぷりなので、ここでライフポイントが0になるといふことは帰宅後別の意味でもライフポイントが0になることを意味していた。

「…………の授業で……寝たら……マズ……」

眠気に必死で耐えている健気な少年だが、彼は自分の目が遠目で見て開いているのか閉じているのかわからない状態になっているという危機的状況に気づいてはいない。隣に座っているポニーテールの女の子が親切にもシャーペンでつついて彼を起こそうとしたが、それより数秒早く、その危機的状況がついに死の宣告へと変わってしまった。

「…………ということまでこれを解くとどういう式になるんだ、志賀」

「……………！は、はふい！？」

名前を呼ばれた彼は数秒遅れてふと我に返り、その後空気の抜けるような返事とともにガタンと勢いよく立ちあがった。

まずい。非常にまずい。

指されただけでも寝ていた疑いをかけられていることは明らかなのに、彼は解説はおろか問題すらもまともに聞いていなかった。こんな状況で「わかりません」などと答えたらもれなく「ドキッ!?」先生だらけの職員室ツアー2時間の旅!」への強制参加が決定することはいうまでもない。

突っ立ったまま、彼はこの先に待ち受けているジエノサイドを思い浮かべて嫌な汗を浮かべることしかできなかつた。

教科書をもつ教師の手の人差し指が規則的なリズムを刻む。

指されて起立した生徒が何も答えられないでいると、大抵の教師

はそこでヒントを出したり愚痴をこぼしたりあるいはその生徒を座らせたりなど、とにかく何らかのモーションをとって授業の進展を優先させるのが普通だろうが、この鬼教師は違う。彼は生徒が何か言うまで自分からは決して何も言わず、むしろその「無言の圧力」こそ、生徒がこの教師を恐れる最大の理由の内の一つとなっている。そして「わかりません」と答えたら最後、静かに「終業後職員室に来なさい」と告げてその後の運命は察しの通りである。

「ど……どどどど……どう……どう……しよう……??聞いてなかったことなんて分かるはずないし、かといって地獄の書き取り50回は……で、でもやっぱり覚悟を決めるしかないのか……ああああああ……!!」

悲痛な叫びを頭に浮かべたところでどうにもならない。

直樹の場合も例に洩れず、既に指されてから2分以上が経過していた。この教師は黙っていれば平気で残りの授業を解答待ち時間に潰すに違いないのだが、さすがに残り1時間以上もあるこの授業をずっとヘビーサイレントのまま過ごしていけるほど直樹の精神力は強靱ではない。ばつの悪い泣きそうな表情を浮かべながら、いよいよポツダム宣言受託のために腹をくくって「……わかりません」と答えようとしたそのとき、

右足の太ももに、何かが当たる感触がした。

となりを何気なく眼だけで見ると、机の上のノートの端に「直樹君へ。答えはレーフェンド関数。ゼクス定数はi」と書かれていた。視界の端で、ポニーテールの女の子が直樹にニッコリと笑いかけている。

「ま・・・まさかの、て・・・天使の来日!？」

左手の窓から差し込む光も十分眩しいが、今は右手にそれ以上の眩い光を放つ天使様の姿があった。彼女が勉強のできる方だという話は皆目耳にしていけないが、このすさまじい「頼れる人」オーラは一体どこからくるのだろうか？

とにかく助かったー!！と心の中で胸を撫で下ろしながら、彼は突如手の内に転がり込んできた切り札を使ってなんとかその場を切り抜けた。

「お・・・終わったあああ・・・」

半日と一コマで終わる土曜の放課後に、90分間で様々な敵と戦い抜いた果敢な少年の凱旋歌が空に溶けていった。

#3 「超演算者」の少女 2

「それで、この子が現在最も『サーキュレーター』の能力に近いというわけか」

雑用物が乱雑に置かれた、本来は白一色のはずの部屋の中で青年は手元のレポート用紙を一瞥する。

彼が座った眼の前の机には辞書や学問書、その他様々な書類が山積みになって放置されており、一見すると何を見ているのか傍目では判別がつきにくい。が、本人はきちんと位置の把握ができているらしく、馴れた手つきで書類の山から2枚ほど用紙を取り出すと、先ほど見ていたレポート用紙と見比べて何かを書きこみ始めた。

「とてもそんな風には見えないけどね。どちらかというと、外で元気に走り回っている方がしっくりくるかな」

「てめえの私見なんざどおでもいいんだよ。それより聞かせろ。『超演算者』なんて、何で今更そんな無駄な能力を研究する気になったんだ？てめえが次回発表する論文には全く無関係の分野だし、そもそも高性能集積回路が発達した今の時代、高演算能力なんて必要なすぎて誰も研究しちやいなえじゃねえか」

机を挟んで真向かいに立っている少年が怪訝そうな顔で言葉を投げる。紅く鋭い眼を持った、好戦的な少年だった。

「言うほどの理由なんか特にないよ。ただ、あえて言うなら『もしかしたら・・・』って思っただけさ」

「何が『もしかしたら』だ。曖昧な答えで飄々と受け流すんじゃね

え。さつさと答える」

「というか何で君はそんなに躍起になつて居る？君にとって別にそこまで重要なことでもないだろうに。あと少しすれば能力も元通りになるんだらう？」

言われて、『真実者』は言い返せない。確かに彼の能力をもってすればたかだか人間一人の考えていることなど容易に透視できる。テロ未遂から既に5週間以上が経過しているため、そのときに打たれた能力抑制剤もそろそろ切れる頃合いなのも事実だ。ただ少年が焦っているのはそれにこそ理由があり、そしてこの青年だけには知られるわけにいかなかったからである。

（俺はテロを起こして死にてえと思つて居る人間だ。前みたいに死ぬ寸前でまた助けられたんじゃあ話にならねえ。そうでなくともコイツは俺が不審な行動をとれば危険を覚悟で真つ先に止めにかかるだろう。本格的に怪しまれるのだけは避けるべきだが、ただこいつの『脱線』がもし俺の能力を抑制する研究の一部だとしたらそれはそれでまずい状況になる。クスリが切れると同時にその研究成果を試される可能性も考えれば奴の研究目的も早く聞き出しておくべきだが、どういうわけかアイツに関することだけは能力で読み取れねえんだよな）

少々考えた拳句、彼は渋々引き下がることにした。

「・・・まあいい。とにかくそいつが今一番『超演算者』に近いつてことは間違いないだろう。『高演算者』一人一人をチェックできるほど能力が回復してるわけじゃねえから断定はできねえが、確率数値的にこれ以上はおそらくねえはずだ」

「『98.6%。微弱な指数関数的上昇傾向あり』・・・か。確かにそうだな。これよりもっと高い子がいるとすればそれはコインを

投げて100回連続で表を出すぐらいの確率だろう。よし、わかった。契約外手当は明日以降振り込んでおくから今日は帰っていいぞ。おかげで助かった。ありがとう、『トウルザー』」

「……………」

少年はそれには答えず、無言のまま踵を返して部屋を出て行った。

残った青年はもう一度、先ほど灼眼の少年から受け取ったレポート用紙に目を通す。

難解な数値と言葉が羅列した用紙だが、ただ一つ、そこにはあまりに不似合いな明るい印象を与える写真が添えてあった。

「にしてもホントに意外なもんだな。まさかこんな少女が現在最も発達している集積回路と同等か、あるいはそれ以上の計算能力を手にする才能を持ち合わせていたなんて」

両側の頬でピースをした、泣きボクロが印象的なポニーテールの笑顔の少女がそこには写っていた。

#3 「超演算者」の少女 3

「……にしてもさっきはありがとう、居舞さん。おかげであの地獄の書き取りから逃れられたよ」

「やーやー、前に私も直樹くんに助けられたし、困ったときはお互い様よ？あんなムチャクチャな課題やってらんないしねー」

「そつだよね。一回やらせるならまだしも、なんで同じ問題をわざとわざと50回もやらせるかなあ？反省しろってのにも限度があるって」

「直樹の兄サン、それはあれですよ？あまり大きい声では言えませんけどね、あいつはきつと私たちがヒーヒー言いながら机に向かっているのを妄想してモンモンしてるアブナイ人なんですよ？」

「『モンモン』て……一体何してるのさ？」

「きゃーそれはとても私の口では言えない！！それをおんなのこに言わせるのは全世界の乙女を敵に回すのと同じことですよ！？まったくもう、直樹くんのエッチー！」

「ッ!？」

「……なーんてことを私に言われる妄想をしていた直樹くんもそろそろアブナイ人？」

「してないよッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!勝手に人を妄想変態セクハラ大臣賞にノミネートしないでくださいいいいい……………」

深緑の街路樹が光を散らす歩道を、賑やかな二人が並んで歩いている。直樹は何やら壮絶な表情を浮かべているが、大きなポニーテールが印象的な、居舞と呼ばれた少女は、むしろ彼の反応を心底楽しんでいるようであった。

「ふっふっん。冗談冗談。直樹くんって必死になると普段からは想像できないようなびっくりワードが飛び出すよねえ。いや〜眼福眼福。いや、もしかして耳福？」

「ハアアアアア・・・もう勘弁してよ〜〜」

「だから冗談だったってば、シケた顔しないししない。あ、弘毅くんが来たみたいだよ」

言つて、直樹の背を叩く。彼も同じく振り返り、立ち止まって弘毅を待つことにする。視線が示すその先には、精悍な顔つきをした、茶色がかかった髪を持つ、二人と同年代くらいの少年が走っていた。

「でうえ〜とちゅ〜のおっふたつりさん お邪魔ムツシでわってるいっけど〜よっけりゃあ〜一緒に帰ろ〜ぜ」

声に妙なテンポをつけて弘毅が駆け寄ってくる。軽快なリズムの走りにワントンポ遅れる形で、背中に背負われた濃い灰色のリユックが上下左右とせわしなく動く。今は土曜の昼下がりだが、平日であっても現代ではもはやランドセルという単語は死語となっている。年功序列に従った学年区分が曖昧な上に、そもそもランドセル自体が時代のニーズに合わせて変化していったことでリュックに近い形となったためだ。

「弘毅、僕が女子といるといつもそれだよ。今は周りに知り合い

はいないけど、学校ではホントに変な噂が立ちかねないんだから」

「まあ、弘毅くんらしいっちゃらしいです。ほんじゃ、一緒に帰るとしますか」

日差しが眩しい午後の歩道を、三人は再び歩き始めた。

「・・・で、結局あの鬼九条から逃れたわけか。そりゃあ居舞さまさまだったな、直樹」

並んで歩く三人の中心にいる弘毅が、うんうんと頷いている。

三人は大通りに差し掛かっていた。先ほど弘毅が合流したところとは違い、アーケードの天井に覆われたここは人の数も相当なものだった。窮屈なほどではないが、注意していないと肩がぶつかる。商店街全体でセールをやっているせいもあるのかもしれない。

「ま、人間大切なのは助け合いの精神ですよ、弘毅の兄サン」

「それはすごく分かるぞ、居舞。今日だってもし居舞の助けがなかったら俺達の遊ぶ予定は全部パーだった」

「そうだよ。あ、もしよかったら居舞さんも遊ばない？何するかは決まってるけど」

「あ・・・でも今日は」

言いかけたところで、彼女の口が停止する。

「おや？と思った弘毅と直樹は、彼女を見る数十メートル先を無意識に目で追つと、そこでは

アーケードを覆う天井が地に向かって盛り上がっていた。

「あれ、結構危くないか」

「うん。僕もそんな気がする」

二人は顔を見合わせる。かといって崩壊寸前というわけでもなく、別段急を要するようには見えない。そもそもが「言われてみれば」というレベルのため、見方によってはそこだけあえてそういつくりにしてあるようにも見える。そんなことを適当に考えた二人は居舞にも話を振ろうとして

ギョツとした。

さっきまで隣にいたはずの彼女が、アーケードの凸の下目がけて猛スピードで人ごみをかき分けている。

「ちょ!?!い、居舞さん!?!」

「ど、どうした居舞??」

聞こえているのかいないのか、呼びかける声も無視して彼女は走り続ける。仕方なく二人も後を追うが、彼女の方が既に10メートル近くリードしているため、なかなかその距離が縮まらない。

「くそ、何がどうなってんだ?」

若干の苛立ちを交えた声で、弘毅が言う。直樹も必死に彼女を呼び止めようとしているが、人と人との間を縫う走りでは思うように

声が出ない。悪戦苦闘しながら彼女を追っていると、ふと耳に聞き覚えのある声が入ってきた。というか、ついさっきまで間近で聞いていた声だ。どうやら彼女も何かを叫んでいるらしい。

「自販機周辺にいるみなさん！！逃げてください！！天井があと少しで崩れます！！」

周囲の人々がギョツとして天井を仰ぐ。

見ると、ついさっきまで安定を保っているかに見えていた天井が、まるで水滴が落ちるように中央から崩落しようとしていた。パニツク状態に陥ったかと思われる人々の中には、我先にと店内へ避難する者もいれば、率先して人々の避難を促している者もいる。「計算上」あまり効率のいい指示とは言えないが、局所に気を配っているだけの時間的余裕もない。額に嫌な汗を流しつつも、彼女はできるだけ冷静になるように努めながら周囲の人々に指示を飛ばしているうちに、

ぺたりと座り込む小さな女の子を視界にとらえた。

「！！！？？」

涙を蓄えた目をこすりながら、必死で「おかーさん！！」と叫ぶ姿を見て、彼女は一瞬時間が止まるのを感じた。少女を挟んで反対方向に「72.3メートル」先には、少女の母親らしき中年女性の泣き叫ぶ姿が見える。2、3人の大人が駆け出しているのが分かるが、そこからではどうあがいても天井の崩落の方が先に少女を襲うだろう。彼女を助ける方法は？崩落から彼女を守る「方程式」の「答え」は？

(・・・||6.239。これなら2秒半あたしの方が速い！)

人ごみを縫って最前列に出た直樹は直後、青いリボンで縛った大きなポニーテールが魔物のような天井の真下に向かって走り出すのをとらえた。

「なっ

」

驚愕で目を見張った彼は、二酸化炭素が抜けるだけの声にならない叫びを上げる。が、それが人々の耳に入るかいなかの、その刹那。

魔物が彼女に瓦礫の山を叩きつけた。

#3 「超演算者」の少女 4

見覚えがあると思った。

他にもない、それは彼が両親を失ったあの日。灼熱の業火と人々の喚声で埋め尽くされた『あときの光景』によく似ていた。違うのは目の前が火事であるか瓦礫であるかだけだ。

季節はずれのゾクゾクとした寒気が背中を撫でる。

瞬間前に見えたのは、紛れもなく彼女のシンボルそのものだった。刹那とも永遠とも思えた『1シーン』の中、彼女は確かに崩落する怪物に向かって駆け出していたはずだった。その危機にも気付かずただ嗚咽を漏らしている一人の少女を助けるために。

死んだと思った。

常識で考えて間に合うはずがなかった。

彼女が『常識の通じる能力』の持ち主だったならば。

それだけに。

「直樹くん、あまり長くいると色々面倒なんでさっさととんずらでくすよ？」

『後ろから聞こえた』場違いに間延びした聞き慣れた声に彼は戦慄したものだっただけだ。

「……は??……え??……ええ!!??」

固まっていた思考が正常な回路を取り戻すや否や、彼女は直樹と数メートル離れた所に棒立ちしていた弘毅の手を引いて一目散にその場から逃げだした。『幽霊を見たかのような』驚愕と困惑に満ちた表情を張り付けている二人が、彼らより若干背の低い女の子に手を引つ張られて走らされている様子は、後に居舞によって散々笑いの種にされることとなった。

「良かったのか?あのまま名乗り出れば一躍ヒーローだったのに」

「やゝやゝ、あの子は結局助かったんだからそれでいいんだよ」

「でもあのお母さんは居舞さんにお礼がしたかったんじゃないかな」

「まあ、それはまた今度会う機会があったら、ということだ」

閑静な住宅街を縫う通りの一本で、平常心を取り戻した2人と相変わらず賑やかな一人が談笑しながら歩いている。あれだけのことがあったの外は本当に静かなもんだな、と直樹はポカポカな陽気に目を細めつつ考えた。というのも、当人は瓦礫の雪崩に突っ込んだにも関わらずかすり傷一つ負わずに生還しているからである。

「にしてもホントにびっくりだね。あんな瓦礫の雪崩に突っ込んだにも関わらず本人はピンピンしてるんだから」

「あんなこと普通じゃできねえ。『高能力』じゃあないよな？『超』の域に達してるだろ？一体何の能力なんだ？」

「さっすが弘毅くん。よくぞ見抜いた！汝に『妄想変態セクハラ大臣賞』の称号を授ける！」

「いらねえよ！！ってかなんでそんな話に飛ぶ！？そんな不名誉な称号もらった日には交番の前歩いただけで警察が血相変えて襲ってつくるわー！！」

突然の意味不明な振りに弘毅が血相変えてギャーギャー騒ぐ。何の負い目があるのか、一方の直樹は伏し目がちに苦い顔で二人を交互に見やっっている。居舞はふう、と静かに息を吐くと自らの能力についてゆっくりと話し始めた。

「『サーキュレーター』っていうらしいの」

ん？といった感じで二人の視線が彼女に集まる。

居舞は続けた。

「『カリキュレーター』に絶対空間認知能力が付随して進化した『超能力』のことなんだって。単純な計算能力も数十倍上がっているけど、何より大切なのは『自分を原点とした物体と原点との距離が一瞬で分かる』っていうところね」

例えば、ここに同程度の計算力をもつ二人がいたとする。その二人に「ビルの高さを計算せよ」という課題を出す。ただし一人には「自分を原点O、ビルの先端を点A、ビルと地上との接点を点Bとしたときの三角形AOBの辺OA、OBの長さ、角AOBの大きさ」を先に教えておき、もう一人には何も教えなかったとする。すると、

前者は与えられた条件を使って頭の中でペンを走らせるだけで答えを出せるが、後者はそれに加えて先の条件にあった距離と角度を実際に測りに行かなければならないという手間を負うことになる。どちらの方が先に答えを出せるかは想像に難くない。

大体そういうことだろうか、と直樹は分かったような分かっていないような曖昧な相槌を打ちつつ耳を傾ける。それは弘毅も同じのようだ。

「加えて」

軽いステップで一歩二人の前に出る。

「私の頭の中には数万個もの物理や数学の公式が入っている。『サーキュレーター』になって新しく手に入った空間情報を使ってこの演算を行うと、さつきみたいなギリギリの救出劇も安心してできる、ってなわけですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

普段の彼女からは想像できないような難解な単語が、二人の耳を掠めては消えるを繰り返していた。ただ一つ分かるのは、彼女は常人を逸した能力者であるということだけだ。万の位にのぼるほどの理数公式を記憶し、そして臨機応変にそれら全てを使い分けて計算する。そんな演算をもの数秒であっさりとやってのける彼女の姿は、二人にとって近くて遠い、不思議な距離感を持つ屋気楼のように彼らの前で揺れていた。

「ずっと『役立たず』だったから」

振り返る彼女の瞳は笑う。

しかしそれは先ほどまでのはやいだ明るい笑みではなく、翳りと悲哀の色を帯びた、辛く悲しい笑みだった。

「ただ『誰かの役に立てた』ってことだけで、私はすっかり嬉しいの。お父さんもお母さんも喜んでくれたし、こんな能力で誰かが喜んでくれるなら私はそれで感無量・・・ってね」

「・・・そうか」

弘毅が静かに唇を開く。

結局、彼女は彼女のままだった。彼女は誰よりも人のことを思いやれる「人間」だったのだ。たとえ何百万単位で「ダブった」能力者であったとしても、たとえ何度まわりの人々から役立たずと罵られようとも、その心はずっとただ一つの思いを見つめ続けていた。

誰かのために、何かをしたい。

直樹は何も言えなかった。当然だ。彼の能力も正直そこまで役に立つレベルではない。「だからこそ」、彼は流れていく日常をただ流されるままに生きているだけだったのだ。一方、彼女もあまり実用性のない高演算者であったが、「それでも」常に誰かを笑顔にしたい一心で能力育成に専念し、その芽は先ほどの親子の感謝の涙という形で見事に花を咲かせていた。力と思いを両道した姿勢。そんな彼女に、心打たれないはずがなかった。

かける言葉も見つからず直樹が呆けていると、ふと遠目に見知った人影二つがこちらへ走ってくるのが見えた。若干しんみりしかけた空気をかき消すように、軽い口調でまたもや弘毅が口を開く。

「そんならさ」

祐樹とゆかりがたどり着いたタイミングに合わせるように。

「もういっちょ、俺らで笑顔をつくってみようぜ」

#3 「超演算者」の少女 5

「みどつちだ」

祐樹と並走しながらも、ゆかりは思わず声を漏らした。彼女の左手側を走る祐樹が「？」といった様子で尋ねる。

「おめー、あのホウキ髪のねーちゃん知ってんの？」

「ホウキゆーな！！ポニーテールだ！！」

「別にどつちでもい・・・だー！！分かった分かった悪かったからいい加減リコーダーで叩くのはやめろつての！！」

もうかれこれ十数分はずっと走りっぱなしという状態なのにも関わらず、二人は息をほとんど上げずに声を張り上げ合っていた。総合身体能力強化コースを履修している祐樹ならともかく、運動にあまり縁のないゆかりまで身体能力が向上しているというのは、大部分が祐樹特有の脳波による干涉の賜物だろう。高能力以上になると稀にこういったことができる能力者が現れるのだ。

「・・・で、お前はあのポニーテールのねーちゃんを知ってんのか？」

「しってる。みどりおねえちゃんだ。だからみどつちだ」

「へえ。近所のお姉さんってか」

「そーだ。たまにこまっただときたすけてくれるスーパー・・・」

うん、だからつだつてくれるにちがいない」

聞いていた祐樹はまさにそのポニーテール少女の胸元目掛けてダ
イブしそうになったが、そこはかるうじて免れた。彼は頭が悪いわ
けではない。頭の悪い行動をしているだけなのだ。「スーパーマ
ン』と言おうとして『マン』が男性を示すことに気づき、『スーパ
ーウーマン』と訂正したところ『ウーマン』が思いつかなかった」
という事の真相は心の中にそっとしまっておけばいい。弘毅達のも
とについた以上、今はそのツツコミ以上に急を要することがある。
こうしている間にも強盗はより遠くへ逃げてしまふに違いないのだ。
妖怪のような異様極まりない片足けんけんで近付いてきた彼は真
っ先にその話を切り出した。

「いた！？あいつじゃねえか！？」

5人を先導して走っていた弘毅が叫ぶ。

先ほどのシヨッピングモールだった。彼らがゆかりの能力によつ
て導かれて来たそこでは今だにマスコミや野次馬の集団が崩落現場
を中心に群がっているが、それでも人波はだいぶ引いたようだった。
2、30メートル先を人に紛れるようにして走る強盗の姿が楽に目
で追える。

「そーだ！あいつがバッグひったくっていったんだ！」

「間違いねえ！あいつだ！」

後続して駆けるゆかりと祐樹が筒抜入れずに声を上げる。

彼らが追っているのは、青いジージャンを着てニット帽を被った、いかにもな感じの男だった。追われているのに気づいているのか否か、さつきから弘毅達側を含めて周囲を拳動不審にきよるきよるしながら走っている。まばらというほどではないが、遠目で人が確認できるほどにはすいているため、周囲をやたらと警戒している様子が間抜け筒抜けで結構可笑的い。

弘毅もそんな様子に自分たちの力量を確信したのか、余裕着々といった感じで残りの面子に指示を飛ばす。

「今回は祐樹が主戦力だ。居舞と祐樹の能力を俺が『同調』シンクロさせれば一時的に祐樹は『計算して攻撃、防御を行う喧嘩』ができるようになる。1分くらいしかもたないだろうから速攻で勝負をつける。ノックアウトしたら奴からバッグを奪還してとんずらだ！俺と直樹、ゆかりは後方支援。直樹は本当にヤバかったら『零』を使ってくれ」

「わかった」

「まっかせて〜。祐樹くん。ジャンジャン突っ込んで平気だよ〜」

「ようし分かった。ジャンジャンあの野郎をぶっ飛ばしてやる！」

了解する一同を見て、最後にリーダーは高らかに一言。

「それじゃあ……ミッションスタート作戦開始！！！」

言うと同時に、弘毅は後ろにまわって居舞と祐樹の後頭部に手をかざした。パチパチッと、彼の手と二人の後頭部との間で静電気のような青白い電気が飛び跳ねる。

直後。

「待ちやがれええええええええええジージャンの野郎おおおおお」

祐樹が猛る勢いで強盗目がけて突っ込んでいく。

ビクウ！？といった感じで振り向いた男の顔面目がけて、風を切るような拳が炸裂した。が、男は寸前のところで上体を倒してかわし、流れの動作でジージャンの懐に手を突っ込む。

出てきたのはバタフライナイフだった。

(ツ！？)

視界にそれを捉えた祐樹の身体が一瞬凍りつく。

その隙を見計らったように、男がナイフを構えて突進してきた。初撃の勢いで5、6メートルほど距離が離れていたとはいえ、全力疾走の勢いを残したままではカウンターに対応できない。

(くツ・・・)

低くした体勢のまま、右肩をナイフが掠めていく。

幸い出血はないようだが、いちいち気にしてる暇はない。祐樹は低い姿勢からバネのように飛び上がり、その推進力で全力の肘鉄を男の鳩尾に打ち込んだ。「計算された」その一撃は見事に決まり、男は自分の胸元を鷲掴みにして歩道の上を転がっていく。

(すげえ・・・半ば反射的に体が動いたぜ・・・)

肩で息をしながら祐樹は驚きの表情を浮かべる。

対して男は蠢くだけだった。祐樹の推進力+男自身の運動エネルギー

ギー＋最大効率で発揮された力という壮絶な衝撃を受けた彼の鳩尾では、ダメージどころか気道までもが塞がれてしまつてまともな呼吸ができていない。

「つか、あつかなかつたな。いくら速攻で勝負をつけるつもりだったとはいえ・・・あ、でも肩の服が切れてるからやっぱりギリギリだったのか・・・」

安堵した息を吐きながら祐樹はくるつと踵を返した。男の手元にバッグはない。さつきナイフを取り出したときに足元へ落としていたのだ。祐樹を挟んで男と反対方向に転がっているバッグに向かって、彼は歩み寄つて手を伸ばし拾おうとしたが、そのとき

「危ねえ！！祐樹、後ろ！！」

弘毅の絶叫が空気を裂く。

完全に気を抜いていた祐樹の後ろで、男が手に持っていたバタフライナイフを投げつけたのだ。乱方向に回転してはいるものの、その動きの矛先はまっすぐ祐樹に向かって牙を剥いている。運が悪ければその刀身が祐樹の体に深々と突き刺さるかもしれない。

（くそ！！どうにか）

しかし考えかけたところで思考が止まった。

なぜなら、今まさに祐樹目がけて投げつけられたはずのバタフライナイフが、空中で急に減速した後

ぐにやり、と二つに折れ曲がつて落ちたからだ。

「????・・・ああ！なるほど。『今回はこうなった』ってことか」

一瞬遅れて事態を把握した弘毅が崩した表情で直樹を見る。
そこには、冷や汗を流して右手を構えた『零』の能力を持つ幼馴染の少年の姿があった。

#3 「超演算者」の少女 6

「本当にありがとうねえ」

夕暮れのオレンジが照らす広場で、少し腰の曲がった老齡の女性がペコペコと頭を下げている。

中心街から少し外れた所にある、三坂公園だった。ジャングルジムやブランコ、砂場など、子供が遊ぶのに必要な遊具は一通り揃っている印象だが、反対に人気はあまりなく、周囲を囲む柵にはかなりの老朽化が伺える。近傍にはマンションがあり、柵の外はその駐車場で2メートル弱ほど低くなっているため、安全管理が行き届いているわけではなさそうだ。そんな公園を、祐樹とゆかりは老齡の女性との待ち合わせ場所に使っていたのだった。特に深い理由はなく、先ほどの強盗事件がたまたまこの公園の前で起こったためにこの場で待つてもらっただけだ。

「やーやー、そんな大したことはしてないですよ？」

「そーだぜ！？こんな軟弱野郎一人捕まえるのなんてお茶の子さいさいってか」

結構な身長差のある居舞と祐樹が二人揃って照れたようにはにかんでいる。

弘毅は男が逃げないように見張っていた。彼の能力は居舞の能力シンクロと同調することで「対象一人を空間座標と同調させる」、つまりその場に縛りつけたり望んだように動かしたりすることができるようになるらしい。思いつきで考案した応用術だが、こうして弘毅は男を通りからここまで引っ張ってきた。今は手を縛られてうなだれている男に向かって罵詈雑言を浴びせている。一方のゆかりと直樹は

彼らから少し離れた所で警察の事情聴取を受けているようだ。

照れた表情を崩さないまま、老齢の女性と二人は雑談を続ける。
やがて、居舞が思い出したように少し視線を下げて尋ねた。

「そ〜いえば、その箱って何が入ってるんですか？綺麗なラッピングがしてあるけど、もしかしてプレゼント？」

「そうよ。今日は孫娘の誕生日でね」

少し皺のある顔つきに、喜びが滲む。

手の中にあるのは、ソフトボールが1つぴったり入るほどの大きさの、立方体の箱だった。ピンクをベースにしたマスコットキャラの包装紙に、少し濃い赤のリボンが十字型に巻きついて蝶々結びで留められている。

老齢の女性は続けた。

「髪留めが入ってるのよ。ちょうど今翠ちゃんがしているようなりボンが付いてるわ。大きさは少し小さいけれど」

「ホントですか！？いや〜なんかそう言われると余計に照れちゃうなあ〜」

「ふふつ。でも本当にありがとうね。翠ちゃん。それに祐樹君も」

包みを挟んで3人が微笑む。涼しさを帯びた優しい風が、彼らを撫でるように心地よく流れていた。既に日は沈みかけているが、心は日差しを浴びているように暖かい。

ふと後ろから声がかかる。

警察の事情聴取を終えた二人が帰ってきたのだ。

「みんな、もうそろそろ帰ろう。時間も遅いし。弘毅も『金目当ての強盗なんてつくこんのクソ野郎があああ！』とか言っていないで。あとは警察が処理してくれるから」

「・・・わかった。帰るか。おばさん、じゃあ俺達はこれで」

「うん。さようなら。今日は本当にありがとうね」

それぞれが挨拶をして帰ってゆく。少年達が帰った通りからは、彼らしいふざけてはしゃいだ声が入ってくる。老齢の女性は、彼らの帰った道とは公園の角で交差する形で通っている道を住宅街に向けて歩き始めた。

「あ、お母さん！おばあちゃんいたよ！おーい！」

少し先で手を振る少女が祖母のもとへ駆け寄ってくる。

その顔にあるのはアーケードでの助けを求める泣き顔ではなく。

ポニーテールがよく似合う、無邪気で心優しい笑顔だった。

#3 「超演算者」の少女 6（後書き）

今回の話は直樹達の身近にいるビックリ能力を持つ同級生の話でした。

こんな感じの話をやってみたいなあと書き始めた時から思ってたが、主要4人の能力についての説明がまだ曖昧のまま残っているので、今後の展開で明らかにしていきたいと思います。

今回は肝試しの話をやろうと思ってます。長さはまだ未定ですが、次回も読んでいただけることを切に願って執筆に取り掛かりたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530f/>

キミノウタ

2010年10月10日23時17分発行